

諸橋轍次記念館

最近、マスコミに取り上げられることが多い、アウトドアの総合メーカー、スノーピークの本社を訪ねてみました。上越新幹線の燕三条駅から車で40分ほど。少しだけ山に入った場所にあります。もともとはゴルフ場。フェアウェイをキャンプ場にしています。テントの傍まで車が入ることができ、水場や炊事場も随所にあります。快適そうです。訪ねたのは午前中、関東からの車が続々到着し

ます。受付は本社にありますが、長蛇の列になっていました。消費者と本社が直接つながっています。キャンプ場に張られるテントも豪華です。幾多のテントをみるキャンパーは、より良い道具が欲しくなるであろうことが想像できます。

帰り道、同市庭月にある諸橋轍次記念館に立ち寄りました。『大漢和辞典』の编者として名前を聞いたことはあるけれどよくは知らない人。記念館で資料をみると、1883年に当地（旧下田村）で生まれています。生家も保存されています。1919年に中国に留学し、そのときに漢和辞典の必要性を痛感。1925年に大修館書店店主の鈴木一平から、漢和辞典編纂の依頼を受けます。43歳の時です。それ以降、勤務する学校が変わっても、編纂チームは変わらずに運営し、辞典を編纂されました。第一巻の発刊は1943年。1945年には東京大空襲によって組版と資料を喪失。1946年から再



▲諸橋轍次の生家前に立つ筆者

度編纂に取り組み、1955年に第一巻を発刊。13巻まで発刊されたときは1960年、78歳になっておられます。総頁数は1万5千頁だそうです。再編纂に取り組みられた時期には、右目が失明、左目も視力が衰えた状態だったとのこと。そのような体調で、用例をカードに書き写し、それを編纂するという地道な作業を続けられました。1982年に100歳で永眠されています。座右の銘が「行不由徑」（行くに徑みちに由らず——小道を通らず大道を進むという意味）とのこと。

辞典編纂は、地道な仕事です。用例を採集し、カードに書き写す。何枚たまれば辞典ができるのかも見通せない。強靱な意志がなければ続かない仕事だと思います。諸橋轍次という人物と、チームメンバー、書店店主の意志の強さに敬服の思いです。

（MBO実践支援センター代表 大阪商業大学特任教授）

